

2026年度

《第1回 2科選抜入試》

国語

時間50分、100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収します。

郁文館中学校

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

リーダーには、百人いたら百通りのリーダーシップがあると思うが、「①これだけは絶対にリーダーが持つておくべきもの」があると私は考える。これをチームのメンバーに分けてしまえば、もはやリーダーではなくなるという部分があるのだ。それは、この本の「二十一の法則」のいくつかに重なっているが、まず一つ目は「ミッションに対する情熱」である。何のために、その事業があるのか、そのチームがあるのか。それに対する情熱、思い入れが一番強い人でなければ、リーダーは務まらない。一番強く思っているからこそ、本書の「影響力の法則」「成長の法則」でも書かれている通り、「カリスマ性」も生まれる。「挑戦意欲」も「向学心」もかきたてられる。

二つ目は、「事業や仲間に対する愛情」だ。これが一番強くないと、リーダーにはなれない。わかりやすく言えば、「部下を守りたい」という愛情が前提としてあって、自らが矢面に立つ、渦中に飛び込んでいくという気概がなければ、人心を集めることなどできない、ということだ。これをマクスウェルは「奉仕の法則」「信頼の法則」「尊敬の法則」等で、懇々と説いている。

三つ目は「自信」である。「他の人ではない、これは自分がやることなのだ」という強い思い込みがなければ、リーダー失格だ。「自分がやらねばならない。この戦いは自分しか勝てないーそういう強い思い込み。それがなければ「あの人と同じ道を歩いていきたい」とA周囲に思わせることはできない。

以上、挙げた三つのうち一つでも失ったとき、その人は「リーダー権」を失う。つまり、リーダーとしての存在感を失うのだ。もし、その三つを持っていないならば、その人は今すぐサブの立場に移るべきだ。たとえば、会社に役員が七人いるのなら、二十一の能力を一人が三つずつ持つていけばいい。人それぞれ得意・不得意があるから「完全なる人格、完全なるリーダーシップ」を全部一人でこなすのではなく、足りないものを補い合えるチームを作れとマクスウェルも強調している。しかし、私が今挙げた「情熱」「愛情」「自信」この三つだけはトップが持つべきものだ。(a)「ああ、そうか。チームを作って二十一の能力を揃えれば、自分はリーダーになれるんだ」と思っているなら、そこには大きな落とし穴がある。そのことを、本書を読み始める前に、まずしっかりと頭に叩き込んでほしい。

この本には、一見当たり前のようであるが実は非常に重要なポイントが書かれている。たとえば、「リーダーの資質で組織の九九％は決まる」ということだ。それをマクスウェルは「リーダーの限界が、組織の限界」と②天井の法則で書いている。私の組織論から言っても、たとえば店長でいうと、誰に任せるかで九〇～一一〇％くらいの幅で業績に差が出る。店長の業績幅が、なぜ九〇～一一〇％かといえは、メニューや看板がすでに決められている、つまり「前提」が多いからだ。逆に前提が少なくなるほど、幅は広がっていく。会社のトップであれば、業績の幅は、〇～一〇〇％、いや無限大だと思う。(b)「前提を自分で作る」からだ。今、自分が、どのようなポジションにあるにせよ、一人で仕事をしていない限りは、誰もがその立場に応じて、九九％の業績の責任を担うリーダーなのだとは私は考える。だからこそ、私は本書をすべからく多くの人に読んでもらいたいと強く願うのだ。

以下に、マクスウェルが挙げた二十一の法則のうち、特に重要と思われるものを、私なりの視点から解説していく。まず、「影響力の法則」にある「人は何を言うかよりも、誰が言うかに注目する」というくだりだ。つまり、言葉が発したときには、相手がそれを受け入れるかどうか、すでに決まっている、ということだ。人は「発言の内容」よりも、「その人が言うなら受け入れよう」と考えるものだ。

(c)、③リーダーシップとは、「何を言うか」という、その場面にかかっているのではなく、相手とのそれまでの触れ合いの時間全てにかかっている。「全ての空気の共有」がリーダーシップなのだ。そこをわかっていなければ、「俺も今日からリーダーだ。さあ、みんなの前でいい話をしよう」「こんな大事な話をしたのに、なぜみんな聞いてくれないのか」という事態が生じる。これは、その人の普段の立ち居振る舞い全てが、リーダーではないからだ。よくノウハウ本などで、「人を惹きつける話し方のテクニク」などと言われるが、私は本末転倒だと思っている。口を開く前に、人が動くか否か、もう勝負は決まっている。その点については、多くのノウハウ本には書かれていない。だからこそ、本書を読むべきなのだ。とにかく、企業にしる、組織はトップの器以上には大きくならない。トップはその器を「人間的・人格的な面」と、「知識的・経験的な面」で大きくしていくしかない。だから、リーダーが学び続けることは当たり前で、「成長の法則」では、何を学ぶかについて、丁寧に書かれてある。「自分が何を知らないか。自分が何を知るべきか」ーしっかりと現状分析、現状把握をした上で学ぶ。学ぶ方向性を間違えない、ということだ。その意味で、マクスウェルが挙げているベンジャミン・ディズレーリの「人生の成功の秘密は、その時が来たときに準備が整っていることである」という言葉は、まさにB至言である。チャンスは誰にでも訪れる。「チャンスをモノにできる人、できない人」の差は、準備をしているか否かだけの差だ。そして、「準備とは何か」と言えば、「学ぶこと」にほかならない。自分が今まで怠けていたからチャンスを逃したわけで、実にシンプルなことだ。

また、「針路決定の法則」では、「④リーダーとしての決断のあり方」について書かれている。決断をする際に当然すべきことは、「最悪の事態を想定することだ。そして、その最悪の事態を想定しきった上で、ぬかりなく準備する。これが、われわれが旅に出るときに必須条件になる。それでも、新しい事業を始めるときなどには、想定しなかった最悪のことが

起きる。マクスウェルは、「他の人より多くのものが見え、他の人より遠くが見え、他の人を見るよりも先に物事が見えるのがリーダー」だと言っているが、言い換えれば、仮説をたくさん立てられる人がリーダーなのだ。

仮説をたくさん立てられるとは、経験、知恵、学びがあるということ。そして何より大事なことは、誰よりも臆病で、誰よりも心配性でなければならぬということだ。つまり、こうなったらどうしよう、あんなったら困る、心配で夜も眠れない。だから、先に先にと手を打ってしまう―これがリーダーのあるべき姿を作っていく。

マクスウェルが「理解してもらおうのに苦労する」と言っていることがある。「直感」だ。これはリーダーにとって本当に大事な要素である。私が冒頭に挙げた『リーダー権』を手にする三つの条件」にもう一つだけ加えられたら、この「直感」をつけ加えたい。なぜなら、リーダーでなければ直感が多分働かない。その理由は、直感には根拠がないからだ。「根拠がない」とは、「リスクがある」ということだ。つまり、リスクを背負える人間でなければ、直感働かせられない。直感「勘」とも言われるが、世の中には「勘のいい人と悪い人」がいる。勘は、教えられるものではないところが難しいと私は常々思っている。強いて言えば、マクスウェルが「リーダーはリーダー (Leaders are Readers)」と言っているように、「状況を読む」「時流を読む」「リソースを読む」「人を読む」「自分自身を読む」ことを意識すれば、勘の向上につながるだろう。

⑤この本のもう一つの読みどころは、歴代のリーダーたちの特徴をマクスウェルが実に見事に分析している点である。たとえば、私はナポレオンの「リーダーは希望を配る人」という言葉に、全くその通りだとひびを打った。「あの人についていたら大丈夫だ。あの人についていたら、何か楽しそうだ。あの人についていたら、何かすごいことができるんじゃないかな」そう思わせるのがリーダーなのだ。そして、そのためには「俺についてこいと言う前に、まず自分が突っ込んでいけ」とマクスウェルは言っているわけである。

また、「権限委譲の法則」の章で取り上げられているアメリカのセオドア・ルーズベルト大統領の「部下の決断に干渉しないだけの自制心を持っているか」という名言も深い。「ここからここまでは、任せるよ」と言ったときには、リーダーにはそれだけのリスクが生じる。会社で言うならば、たとえば「損失十億円までは覚悟しなければいけない」ということだ。それを「任せたよ」と言いながら、十億円分、失敗する前に、五億円で口を差し挟む人が多い。これは本当の権限委譲ではない。これが続くと、「この人は任せると言って、任せていない。俺の後ろには、この人がいるんだ」と思うことになり、その人はいつまで経っても成長しない。任せたら任せるだけの「自制心」を持つことが、リーダーにとって非常に重要なのだ。以下、これは、というところをC早足で見たいこう。

「絶対勝利の法則」も、戦うリーダーになるためには、不可欠のものだ。マクスウェルは、絶対勝利を可能にする秘訣として、「ビジョンの統一」「スキルの多様性」「リーダーの采配」を挙げているが、私に言わせれば、「とにかく、諦めない」ことに尽きる。つまり、もうダメだと思っただとしても、「もう一度頑張ってみようと思えるか」ということである。会社で言うならば、私自身もそうだったが、創業社長の多くは生命保険に入ってお金を借りる。そうすると、周りが「もうダメだな」と思っても、「お前らはもうダメだと言えるかもしれないけれども、俺は言えないよ」となる。結局、最後まで諦めないのがリーダーであり、能力云々の問題ではなくなってくる。(ア)

また、「勢いの法則」も示唆に富んでいるが、これは割と人に任せられる部分だと思う。(イ) どういうことかと言えば、組織というのは、「ローギヤ」状態のときが一番難しい。(ウ)「一番力が必要で、歯車を回すのが大変なとき」に、誰よりも汗をかき、力を尽くすのがリーダーの役目なのだ。そして、グルグル回り始めたら、回っている方向が間違わないかを見ていけばいい。回り出した歯車に勢いをつけるのが得意な人は結構多いが、初めに勢いをつけるために尽力するのがリーダーの役目だ。

それから興味深いのは、「犠牲の法則」である。マクスウェルは「人生はトレッドオフの繰り返し」と言っているが、まさにその通りで、何かを得れば、何かを失っていくのが世の常である。(エ) リーダーになれば、当然何かを達成したときの達成感、喜び、もしくは充実感というのを一番たくさん手に入れられる。(オ) 成功すれば利益も得られるが、その分失うものも大きい。四六時中、会社のことを考えるのは当たり前、会社が危なくなっても逃げることができない。常に周囲の目があり、自由はあるようでない。「リーダーの格が上がると、払う犠牲も多くなる」とあるが、まさにその通りなのだ。

しかし、そうであっても私は読者に言いたい。
⑥それでも、リーダーは素晴らしい」と。

なぜなら、私は「仕事を通して、人間性を高める」ことが「仕事の最大の目的」だと思っているからだ。リーダーとして矢面に立ち、逃げられない状況に自分を追い込むことは、成長するための最高の環境なのだ。だから、たとえ二人しかいないチーム、どんなに小さな組織であっても、リーダーを目指してほしい。五人のチームで仕事をするなら、その中でリーダーになるのだ。組織で動いている現代社会、「今いるポジションから、必ずリーダーになりなさい」と声を大にして伝えたい。

(著者 ジョン・C・マクスウェル 監訳 渡邊美樹 『これからのリーダーが「志すべきこと」を教えよう』より)

※出題の都合上、省略・改編した箇所があります。

問一 線部A～Cの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 () 欄a～cに入る語として、もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア なぜなら イ だから ウ そして エ つまり

問三 線部①「これだけは絶対にリーダーが持つておくべきもの」について、「絶対に持つておくべきもの」として考えているものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 愛情 イ 直感 ウ 業績 エ 情熱 オ 自信

問四 線部②「天井の法則」とありますが、その内容を説明した〈次の文〉の空欄にあてはまる言葉を、本文から二字で探し、書き抜いて答えなさい。

〈組織では、いかなるポジションにあるにせよ、誰もが(二字)のあるリーダーであるということ。〉

問五 線部③「リーダーシップ」について、次の問題に答えなさい。

(1) 同じ意味の言葉を、本文から十字以内で探し、書き抜いて答えなさい。

(2) 「リーダーシップ」が発揮されているかいないか、筆者が判断している部分を、本文から十五字以内で探し、書き抜いて答えなさい。なお、句読点や記号も一字に数えます。

問六 線部④「リーダーとしての決断のあり方」とありますが、筆者の考える「決断のあり方」を本文の言葉を使って四十字以上五十字以内で答えなさい。なお、句読点や記号も一字に数えます。

問七 線部⑤「この本のもう一つの読みどころ」とありますが、その内容としてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ナポレオンの「リーダーは希望を配る人」という言葉の正しさを見事に分析している点。

イ あの人についていけば、失敗しても何か楽しそうだと思わせる重要性を説明している点。

ウ 過去にいた歴史上のリーダー達の特徴を、ジョン・C・マクスウェルが分析している点。

エ 「俺についてこいと言う前に、まず自分が突っ込んでいけ」の批判性を説明している点。

問八 本文には、〈次の一文〉が抜けています。本文にもどす時、もっともふさわしい場所を、文中の(ア)～(オ)の中から一つ選び、記号で答えなさい。

〈これがセカンド、サード、トップギヤ…と事業が回転していくと、歯車が大きいから組織はグルグル回り始め勢いも比較的出やすいのである。〉

問九 線部⑥「それでも、リーダーは素晴らしい」とありますが、理由を説明した〈次の文〉の空欄にあてはまる言葉を、本文から五字で探し、書き抜いて答えなさい。

〈リーダーとして矢面に立ち、自分を追い込むことは、成長するための(五字)だから。〉

問十 次のア～オのうち、本文内容に合うものには○を、間違っているものには×を選び、それぞれ答えなさい。

ア 「二十一の法則」をチームで分担することについて、筆者とマクスウェルは同じ意見を持つている。

イ リーダーが部下に対して、失敗をしない限り任せ続けることを「権限委譲の法則」で説明している。

ウ リーダーの格が上がると払う犠牲も多くなり、逃げられないことを「犠牲の法則」で説明している。

エ 組織はトップ以上の器になることがないが、その例外として企業が挙げられ、文章で説明している。

オ リーダーが絶対に持つておくべきものを前提に、リーダーになることは素晴らしいと説明している。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ちいさなゾウは、おおきなみずたまりのまえにたっていた。

「このみずたまりは、いったいどこまで、つづいているんだろう」

「どこまでだって、つづいているよ」とみずたまりのほうから、こえがした。ゾウはこのみずたまりはしゃべるのか、と、おどろいた。すると「みずたまりじゃなくて、うみっていうんだ」とこえはいった。①ゾウは、なるべくいいねいに、こたえた。

「しんせつなうみさん、おしえてくれてありがとう。なにしろ、こんなおおきなみずたまりははじめてでね。おつとうみだつたね。ごめんよ」

「あはは、わたしはうみじゃないよ、クジラっていうんだ」というと、うみにあったおおきなわが、めをあげた。いわではなかったのだ。それはゾウよりおおきかった。ゾウがおそるおそるちかづく、クジラはうれしそうにいった。

「わたしは、うみのことはなんでもしってるけど、りくことはさっぱりで。ゾウさん、よかったらわたしにおしえておくれよ」ゾウはうなずいてからいった。

「りくにはおいしいたべものがたくさんあるよ。ヤシのはや、きのみ、それにやわらかいくさ。たいようのあじがするくさのおいしいことといったらもう」おなかが(ア)べこべこのゾウはうっかりよだれをたらしそうになった。

「それはおいしそうだね。たいようのあじなんてはじめてきいたよ」クジラもそういっておなかをならした。

「うみにもねおいしいものがたくさんあるんだよ。マグロにタラ、それにイカ。ダイオウイカなんてわたしとおなじくらいおおきいんだよ。あしが10ぽんも、あつて、たべてもたべても、なくならないんだ」ゾウはじぶんよりおおきくて10ぽんあしのいきものをそうぞうすると、ばけものみたいで、おなかがぎゅつとちごこまった。

「へ、へー、それは、なんともおなかが、いっぱいになりそうだね。いつか、たべてみたいな」というがはやいか、すぐにわだいを、かえた。だって、ここに、よんでこられたら、こまるもの。ゾウは、はなをもちあげていった。

「りくには、はながあるんだ。いいかおりがしているとりどりのきれいなはな。そこにはチョウやむしたちもあつまってくるんだ。ちいさくてはっぱみたいに(イ)ヒラヒラとぶんだよ」クジラは、そらを見あげていった。

「へー！そらをとべるのがそんなにいるんだね！うみにはサンゴがいるよ。いろとりどりのきれいなサンゴ。そこにはきかなやカニがあつまってくるんだ。たまごをうむときはもつとすごいんだよ。ほうせきがうみをうめつくすみたいなたまごが、およぐんだ」たまごがなんまんもおよぐ、すがたをそうぞうするとゾウはせすじのあたりが(ウ)ぞわぞわした。

「そ、それはなんともみごたえがありそうだね。そんなにたまごをうんで、うみはサンゴだらけにならないの？」

クジラはいった。「ほとんどさかなたちが、たべちゃうからね」

しずかにしろいなみをゆらすうみが、ゾウは、とても、こわくなった。ゾウが、めをうるませてすこし、おびえていると、「ひつようなぶんだけ、わけあつて、うみというひとつの、いのちみたいに、つながっているんだ。②だからぜんぜん、こわくないよ」とクジラが、やさしそうにわらった。

「それにね、うみにはともだちがたくさんいるよ。うたいながらおよぐイルカ、ふわふわとまうクラゲ、いたずらっこのペンギンとかね。ああ、あいたくなってきたよ」まぶたにうかぶともだちをみるようにクジラはめをとじた。

ゾウははなをすすりながらいった。

「ぼくにだってたくさんともだちがいるよ。Aヨウキなサルに、あしのはやいウマ、うたのじょうずなトリ……あいたいなゾウとクジラはたくさんのかをなした。

「みんなのところへかえらないのかい？」クジラのといかけに、ゾウは、うつむいたまま、「③かえるところなんて、ないと、いった。

「とてもおおきなあらしが、あつたんだ。ぼくはかくれてって、いわれたばしよであらしがすぎるのをずっと、ずっと、まっていた。みみをふさいで、めをとじて……、きづいたらひとりだった……」

ほつりほつりはなす、ゾウをみつめたまま、クジラはだまっていた。

「みんなをさがしてあるきつづけたんだよ！どうしてどこにもいないの？だれも、いないの？ここにはもう、なにもないんだ。ぼく、ひとりぼっちだ」

ゾウははをくいしばって、くやしそうに、いった。クジラはゾウのところが、おちつくのをまった。きつところのなかは、いまもあらしだ。そうおもった。

ずいぶんとじかんがたつてから、ゾウはくびをふった。そしてかぎおとできえそうなおえでつぶやいた。

「だいじょうぶ、きつとどこかで、まってる」ゾウのことばにクジラもそつとうなずいた。ゾウは、かおをあげ、カラッとしたこえでいった。

「クジラさんこそ、かえらないの？うみはどうやら、すてきなところじゃない？」クジラは、なみおとで、きえそうなおえでいった。

「……かえれないんだ、すなにつかまっちゃってね」ゾウは、クジラのことばのいみがわからなかった。

「え、どういうこと？」

「いつのまにか、こんなにあさいところにきてしまっただうしてもでられなくて……。もうあきらめていたところへ、きみが、きたんだ」クジラはやさしいこえでいった。そのこえがとても、かなしそうで、ゾウは、なきたくなった。

「ぼくが、うみに、もどしてあげるよ！」ゾウはクジラに、ぴったりとよりそい、おもいつきり、おした。でもぴくりともうごかなかった。ほんとうに、いわのようだ。なんどおしても、どんなおしかたをしても、ダメだった。

「ごめんよ、ぼくにはどうしようもごかせない。たすけてあげられない。なんにしてもあげられない」ゾウはそういうとがまんしきれずに、こえをあげてないた。

「そのきもちがとつてもうれしいよ。そうだ、さいごにいいことをおしえてあげるよ。カモメにきいたはなしさ。うみのむこうのしまがみえるかい？たべものもたくさんあってらくえんのようなぼしよなんだって。もしかしたら、きみのともだちもさきにいつてるかもしれない。あそこをめぎすといいいよ。ほんのひとおよぎだ」

「さいごなんて、いわないで！もつともつとはなそうよ！」

※

ぼくはおよいだこと

だつてないんだから」**Bヨソ**をはくゾウへ、クジラはいった。

「よし、わたしがおしえてあげるよ。まずはうみへはいつてごらん」

ゾウはクジラのためにうみにはいった。**④すこしでもながくはなしていたかった。**うみはべとつとしていておもたく、かんじた。それだけでとてもこわくて、かおをつけるゆうきはでなかつた。

「クジラさん、これでいい？」

「ゾウさん、あしのとどかないところまで、いつてごらん。きみには、そのながいはながあるからだいじょうぶさ。それにね、うみはとつてもちからもちなんだ。きみをうかすくらい、へっちゃらさ」

そのことばをしんじて、ゾウはゆうきをしほりだした。すると、うみがゾウをだきかかえた。

「う、ういた！うかんだよ！」

ごぼつ、とみずをのんだりはいたりしながらも、ゾウはおよぎつづけた。はじめておよいだうみは、つめたくてしょっぱかった。

「およげたじゃないか！きみはなんだつてできるんだ！」クジラもいままででいちばんおおきなこえをだした。

そしてあんしんしたようにめをとじた。ゾウはいそいでクジラのそばまでもどつてくるといった。

「つぎはクジラさんのぼんだよ！」うみはちょうどみちてきていた。

「みて、みずがさつきよりふえてるんだ。いまならきつと、かえられるよ。うみだつてちからをかしてくれるし、ぼくはなんだつて、できるんでしょ？」そういつてゾウはまえからよこからぜんりよくでおした。

⑤それでもクジラはうごかなかった。

クジラのめからおおつぶのみだが、ごぼれおちた。

「ごめんよ、ごめんよ、もういいんだ」ゾウはクジラのこえをむしして、つづけた。

「まかせて、ぼくは、うみくらい、ちからもちなんだ！ほら、クジラさんも、からだを、うごかして！まけるな！」

そのことばはまるでたいようが、こおりをとかすみたいに、クジラのあきらめかけた、ところからだをゆっくりとうごかした。からだをよじり、ずるずると、おびれをはねあげ、**(エ)ずるずると**、ゾウがおすたび、ずるずると、すこしずつうみはクジラをまねきいれた。そして……ついに、クジラのからだがうみへと、しずんだ。ゾウはさげんだ。

「やった！やったね！クジラさん！」

そのとき、おおきなからだだが、そらへはねた。まるで**Cセンシン**からよろこびが、とびだしたみたいに。

「ありがとうゾウさん！さあ、いっしょにおよごう、あのしまへ」「うん、いこう！きみといっしょならこわくない」

ゾウはうみへとびこんだ。

「ゾウさん、つかれたらわたしにのつていいよ」クジラはゾウにいった。

「クジラさんこそ、つかれたら、ぼくが、おしてあげるよ」ゾウのことばにクジラは、わらった。

(オ)つきもほほえむように、ふたりを、てらしていた。

(たなかしん 『ゾウとクジラ』より)
※出題の都合上、省略・改編した箇所があります。

問一 線部A～Cのカタカナを漢字に直して答えなさい。(ただし、楷書でいいねいに書くこと)

問二 線部(A)～(E)の中から擬音語を選び、記号で答えなさい。

問三 線部①「ゾウは、なるべくいいねいに、こたえた」とありますが、この時の「ゾウ」の気持ちとしてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 緊張 イ 奇異 ウ 驚愕 エ 爽快

問四 線部②「だからぜんぜん、こわくないよ」とありますが、「クジラ」が「こわくない」と「わらった」理由としてもふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海の中に想像できない大きな生物やたくさんの生物がいることを知り、怯えるゾウに安心してもらうため。
イ 海の中にいる大きな生物をこの場所に呼び出されてしまうと慌てて困っているゾウに安心してもらうため。
ウ 大きな生物やたくさんのお生物を教えることよってこのあと仲間のもとへ向かうゾウが安心して泳ぐため。
エ いのちみたいに繋がっている海の素晴らしさを教えることで仲間のもとへ向かうゾウが安心して泳ぐため。

問五 線部③「かえるところなんて、ない」について、次の問題に答えなさい。

- (1) その理由を、本文の言葉を使って三十字以上四十字以内で答えなさい。なお、句読点や記号も一字に数えます。
(2) 「ゾウ」の気持ちが比喩(たとえ)表現でもっとも表れている一文を探し、はじめの五字を書き抜いて答えなさい。なお、句読点や記号も一字に数えます。

問六 文中にある

※

に当てはまる言葉としてもっともふさわしいものを次の

- ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア はなしていれば、いつかなかまがくるよ。
イ それにうみをわたるなんてできっこない。
ウ さいごのじかんになんてしたくないんだ。
エ クジラのひとおよぎはぼくにはできない。

問七 線部④「すこしでもながくはなしていたかった」とありますが、この時の「ゾウ」の気持ちとして

- もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 海を泳いだことがないので、クジラから少しでも長い時間泳ぎを教えてもらいたいと思う気持ち。
イ クジラとの時間が最後になってしまうことが嫌で、少しでもたくさん一緒にいたいと思う気持ち。
ウ 海がべとつとしていて重たく不安な思いがなくなるまでクジラと一緒にいて欲しいと願う気持ち。
エ 顔をつける勇氣は出なかったので、せめて顔をつけられるまでは一緒にいて欲しいと願う気持ち。

問八 線部⑤「それでもクジラはうごかなかった」とありますが、この時の「クジラ」の気持ちを本文の言葉を使って三十字以上四十字以内で答えなさい。なお、句読点や記号も一字に数えます。

問九 次のア～カのうち、本文内容に合うものには○を、間違っているものには×を選び、それぞれ答えなさい。
ア 水たまりを見つけたゾウは、その水たまりが海であることを理解した時からクジラが大きいと認識した。
イ ゾウとクジラは互いの住んでいた場所を紹介し合う中で、別の島に一緒にいる友情が芽生えていった。
ウ 大きな嵐の結果、一人ぼっちになって落ち込んでしまったゾウに、クジラは島を目指すことを提案した。
エ 嵐に巻き込まれたゾウと比べて、浅いところから出ることができなくなったクジラの方が状況は困難だ。
オ クジラは抜け出すことを諦めかけたが、ゾウの声かけや動きによってもう一度抜け出すことに挑戦した。
カ 主人公であるゾウの目線から物語を進行していることで「クジラ」や「つき」の気持ちがわかりやすい。

「問題は、このページで終わりです」

